

高校生への子育て理解講座

——千葉県立佐倉東高等学校での実践を通して——

吉 村 真理子

A Child-Care Understanding Lecture to High School Students :
Through Practice in Chiba Prefectural Sakura East High School

Mariko YOSHIMURA

筆者が所属する「佐倉市家庭教育推進協議会」では、平成16年度文部科学省の「家庭教育支援総合推進事業」の委託を受け、総合的な学習の時間を活用しての、「中・高校生を対象にした子育て理解講座」を実施した。本事業は、今年度も引き続き展開されている。そのプログラムの一部である「妊婦体験」「赤ちゃんの理解」「妊婦さんとの交流」について、昨年度と今年度のアンケート結果等を踏まえて、本事業における子育て理解教育の利点、改善点を考察する。

I 問題と目的

1、子育て理解教育の意義と役割

(1) 背景

①少子化等の進展

近年、我が国は少子化が急速に進行し、一人の女性が一生の間に生む平均子ども数とされる合計特殊出生率は、平成16(2004)年には1.29(前年確定値と同率)となっており、現在の人口を維持するのに必要な水準である2.08を大幅に割り込んでいる。

この少子化の急速な進行は、高齢化と相まって、他国に例を見ない速さで人口構成を大きく変化させており、国立社会保障・人口問題研究所が平成14(2002)年に発表した「日本の将来推計人口」中位推計によれば、2050年には約1億人、2100年には約6400万人まで減少すると予測されている。

この結果として、若年労働力の減少による経済活力の低下、現役世代の社会保障負担の増大や子どもの健全な成長への悪影響など、社会経済に深刻な影響を及ぼすことが懸念されている。

もちろん、子どもを持つか持たないかは個人が決定すべきことであるが、少子化は、仕事優先の雇用慣行や固定的な男女の役割分業など社会全体のあり方に関わる問題であり、抜本

的な対応をはかるためには国民全体の理解と合意が必要といえる。

②乳幼児との触れ合いの機会の減少

少子化によって兄弟姉妹の数が減少するなか、青少年が、新生児の誕生や乳幼児を育てている親の姿を見る機会が少なくなり、自らが乳幼児を世話することによってその可愛さやぬくもりを感じつつ、子どもの発達過程について学ぶ機会が乏しくなっている。そのため「赤ちゃんはいつも泣いていてうるさい」「子どもはわがまままだ」など、単なる表面的な事象としてしか子どもを捉えられなくなっている面がある。

このような青年の子育てに関する経験や知識の不足が、子育てへの不安を募らせ、子育てを負担とのみ感じ、子どもを持つことをためらわせる原因となっているとも考えられる。また、親となったときに、乳幼児の実態についての理解不足から、子育てに対し過剰に神経質になったり、場合によっては、虐待に及んでしまう危険性も孕んでいる。

当然、家庭内においてのみでなく、地域社会においても、幼い子どもとのかかわる機会は減少している。

(2) これまでの文部科学省等の取り組み

教育課程審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（平成10年7月29日）」では、各教科、道徳、特別活動および総合的な学習の時間において、それぞれの教科等の特色に応じ、少子高齢社会の課題に関する理解を深めると共に、実際に幼児、高齢者などと交流し、触れ合う活動などを重視する必要性を指摘している。この答申を踏まえ、平成10年度に告示された新しい学習指導要領では、中学校の技術・家庭科において保育に関する内容を必修とし、幼児の心身の発達の特徴や家族の役割などについて指導することとしたり、高等学校の家庭科において、家庭のあり方や子育ての意義など、保育に関する内容の充実を図ると共に、乳幼児との触れ合いや交流などの体験活動を取り入れること等としている。

また、平成12年4月の中央教育審議会報告「少子化と教育について」では、子どもは社会の宝であり、社会全体で子どもを育てていくことが大切であるという考え方が示されており、子育ての大切さ、親の役割、更には地域の一員としての近隣の子どもとの関わり等について考えさせる「子育て理解教育」という視点をもって、教育活動の展開を図ることの必要性が提言された。

旧文部省においては、平成11年度に、中・高校生の保育などの体験に地域ぐるみで取り組む体制を確立し、乳幼児等との交流や触れ合いの実践活動を促進するための実践研究として、「中・高校生保育等体験促進事業」を全国11地域を指定して実施した。また、平成12・13年度には、これを発展させ、高校生等が幼稚園・保育所等で保育などに関する体験活動に取り

組み、子育ての意義など少子高齢社会の課題に対する認識を深めると共に、地域に対して幼稚園を開放し高校生に子育ての喜びを感じさせ、異年齢交流などによって、幼児の様々な体験活動の充実を図るための実践研究を行う「高校生等保育・介護体験総合推進事業」を全都道府県において実施した。

（３）「子育て理解教育」とは

子育ての意義や親の役割、男女が共同して家庭を築くことの重要性などについて、理解を深め、家族・社会の一員として、特に将来の親として必要な基礎的・基本的な知識・技術を習得すると共に、親として子供を産み育てる、あるいは地域社会の一員として、周囲の小さな子どもたちの成長を支援しようとする関心・意欲・態度を育むものであるととらえることができる。

こうした学習活動は、すべての児童生徒を対象に実施される必要がある。子どもは社会の宝であり、社会全体で子どもを育てていこうとする意識を醸成するには、自分が子どもを持つあるいは持たないにかかわらず、地域社会の一員として、子育てにかかわっていく必要がある。そのために必要となる知識・技能・態度等は、誰もが身につけることが望ましいと考えられる。

（４）総合的な学習の時間における「子育て理解教育」

総合的な学習の時間は、各学校が「地域や学校、児童生徒の実態等に応じて横断的・総合的な学習や、児童生徒の興味関心等に基づく学習など、創意工夫を生かした教育活動を行う」ことができるようにするために創設された。

「子育て理解教育」は、上述のように、その実施が強く求められている極めて今日的な教育課題であり、総合的な学習の時間において、これに関する内容を取り上げることは大変有意義であると考えられる。

高等学校学習指導要領の記述を踏まえたねらいとしては、「子どもとかかわる中で、人間の成長・発達の過程について理解し、子育ての意義や親の役割などを考えることができる」等が挙げられる。

また、主な指導内容としては、「子どもの健康で健全な成長、発達における親としての役割や責任を考えること」「子どもの成長、発達における同世代、異世代とのかかわりの意義と大切さを理解すること」「子どもの成長、発達において、地域・社会が果たすべき役割について考えること」等が考えられる。

2、佐倉市の現状

(1) 中・高校生の意識調査

佐倉市では、「健康佐倉21策定委員会」を設置し、平成14年から15年にかけて「住民健康意識調査」(アンケート調査形式)を実施した。そのなかで、中・高校生を対象とした「育児についてどう思うか」という項目については、図1のような結果となっている。

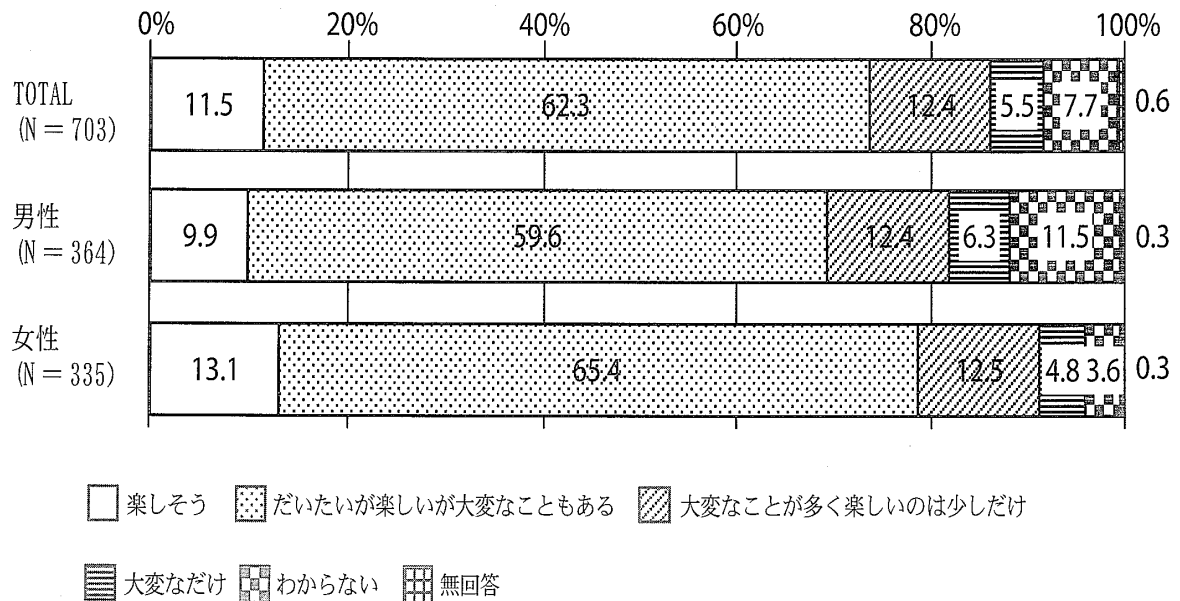


図1 育児についてどう思うか[中学・高校](佐倉市、2004)

中・高校生においては、育児に関して肯定的な意見を持たない人が、全体の約25%となっている。また、他の調査によると赤ちゃんを抱いた経験のない中・高校生が60.6%おり、赤ちゃんを抱いた経験がある中・高校生の方が、そういった経験のない中・高校生に比べ、育児に対して「楽しそう」等、肯定的なイメージを持っている。

(2) 佐倉市家庭教育推進協議会の取り組み

筆者が所属する「佐倉市家庭教育推進協議会」では、平成16年度文部科学省の「家庭教育支援総合推進事業」の委託を受け、総合的な学習の時間を活用しての、「中・高校生を対象にした子育て理解講座」を実施した。本事業は、今年度も引き続き展開されているが、筆者は「赤ちゃんの理解」というテーマに基づき、「赤ちゃんを知ろう！」(平成16年度)・「乳児の発達～生きる力～」(平成17年度)というタイトルでそれぞれ講義を行った。

①事業概要 (学習プログラム)

高校生への子育て理解講座

平成16・17年度ともに、本プログラムの事前学習として、「自分が生まれたときのことを家の人に聞き、作文を書く」という課題を課した。

プログラム詳細については、下表の通りである。

表1

回	日 時 ＜平成16年度＞	日 時 ＜平成17年度＞	テーマ	学 習 内 容
1	6/17（木） 5校時	6/23（木） 5校時	妊婦体験	手作り妊婦ジャケットを着用し、妊娠の成立、妊娠中の生活、胎児の発育について学ぶ。
2	6/17（木） 6校時	6/30（木） 5校時	妊婦さんとの交流	各クラス2、3人の生徒に、自分が生まれてきたときのことを発表してもらう。妊婦さんに、妊娠がわかったときの気持ち、赤ちゃんがおなかの中にいる今の心境などを話してもらう。
3	10/28（木） 5校時	9/8（木） 5校時	赤ちゃん抱っこ練習	沐浴人形を用いて、赤ちゃんの抱き方を練習する。
4	11/4（木） 5校時	9/15（木） 5校時	赤ちゃんの理解	赤ちゃんの心と体の発達についての講座
5	6校時	10/13（木） 10/20（木） ともに5校時	赤ちゃんとの触れ合い体験	赤ちゃんとその保護者に来校していただき、子育てについての話を聞きながら、生徒に赤ちゃんを抱かせてもらう

学習プログラムの一部である「妊婦体験」「赤ちゃんの理解」「妊婦さんとの交流」について、昨年度と今年度のアンケート結果等を踏まえて、本事業における子育て理解教育の利点、改善点を考察する。

なお、対象とした生徒は、普通科の1年生であり、平成16年度は女子156名、17年度は男子38名・女子109名の計147名である。ちなみに、佐倉東高等学校は、平成17年度より男女共学となっている。

II 結果と考察

1、妊婦体験

(1) 実施方法

①手作り妊婦ジャケットの作り方

ビニール袋に、水4リットルと、生卵1個とを入れて口を縛り、ビニールテープで留める。それをリュックサックに入れ、体の前面にくるように肩にかける。さらに、リュックベルトの背中に当たる部分をハンカチ等で結ぶことでリュックを体に密着させ、リュックの上からエプロンをする。

②手作り妊婦ジャケット着用の留意点

着用のまま、5、6時間目（休み時間を含む）の授業を受ける。体調の悪い生徒は、無理せず、苦しくなったら外してもよいことを説明する。また、腹部が冷えるようであれば、腹部にタオルを当ててからリュックを装着するよう指示した。

(2) アンケート調査

平成16年度「手作り妊婦ジャケットを着た感想はいかがでしたか？」

→「妊婦さんは大変だと思った」(79.7%)

平成17年度「妊婦体験をしてみてどのように感じましたか？」

→「妊婦さんの生活は大変だと思った」(86.8%)

昨年度に比べ、今年度は「妊婦さん（の生活）は大変だと思った」との感想を記す生徒の割合が増大している。その理由としては、妊婦ジャケットを着用して体験した活動の違いが大きく影響していると考えられる。昨年度は講義（助産師による「妊娠の成立」「妊娠中の生活」「胎児の発育」に関するもの）を聴くだけであったが、今年度は、「階段の下り、仰向け、靴下の脱ぎ着、炊事姿勢、風呂掃除、ゴミ拾い」といった日常生活で行うような活動を体験してもらった。腹部や背中にかなり負担のかかった状態で、家事等をこなすことの大変さが身をもって実感されたようである。より実態に近い形での体験学習の効果がうかがえる。

妊婦ジャケットを着用しての妊婦体験は、市の実施するマタニティクラスのプログラムにも盛り込まれている。新米パパたちにも妊婦ジャケット着用のまま、階段の上り下りや掃除機がけ、足の爪切り等を体験してもらっているようだが、腹部の重量感や腰への負担感が実感でき、妊婦の大変さをよりよく理解してもらえると、妊婦さん方にも大変好評のようである。

反省点としては、妊婦ジャケット着用時についての指示が徹底しなかったためか、133人中6人が「おなかが冷たかった」「お腹が冷たくて痛くなった」という感想を記していた。

2、妊婦さんとの交流

(1) 実施方法

平成16・17年度ともに、本事業の事前学習として、「自分が生まれたときのことを家の人に聞き、作文を書く」という課題を課した。それについて、各クラス2、3名の生徒に発表してもらっているが、発表者の人選は、家庭環境等を配慮していただけるよう、担任の先生方をお願いした。

その後、妊婦さんに、以下のようなことがらについて、話していただいた。

- ・ 夫との出会い、惹かれたところ
- ・ 妊娠がわかった経緯、そのときの気持ち
- ・ 妊娠後、生活・考え方などで変わった点
- ・ 胎動を感じたときの感想
- ・ 妊婦になって幸せに感じたこと、大変に感じたこと
- ・ 出産、育児に関して不安に思うこと
- ・ 生まれてくる赤ちゃんとしてみたいこと、赤ちゃんにしてあげたいこと
- ・ 生まれてくる赤ちゃんには、どのような人になってほしいか
- ・ 妊娠後の夫の変化、夫への要望
- ・ 高校生に伝えたいこと

(2) アンケート調査（複数回答可）

平成16年度「赤ちゃんのお父さん、お母さんの話はいかがでしたか？」

→「子育ては大変」(62.5%)

→「子育てには責任がある」(44.5%)

→「子育ては男女が協力するべき」(39.1%)

平成17年度「妊婦さんの話を聞いて、どのように思いましたか。」

→「妊娠・出産・子育ては大変だと思った」(66.0%)

→「妊娠や子育ては、とても責任の重いものだと思った」(70.8%)

→「子育てには家族やいろんな人の手助けが必要だと思った」(79.9%)

平成16年度は、妊婦さんから上記のようなことがらについて、約20分間話していただく講義形式をとったが、数十分間話すことへの抵抗感や緊張感は個人差が大きく、妊婦さんの体験談の浸透度にはクラス差がみられた。そのため、平成17年度は、妊婦さんの負担も考慮し、生徒からの質問に対し妊婦さんに答えていただくという一問一答形式をとった。上記の項目

は、生徒からの質問としても十分予想されるため、予め妊婦さん方に提示し、準備をしておいていただいた。後者の形式の方が、妊婦さん方も話しやすかったようである。

アンケート結果をみると、平成16年度と平成17年度とで、1番目の「子育て（妊娠・出産）の大変さ」には大きな差がない。しかし、2、3番目の「子育てへ責任感」と「子育てへの協力体制の必要性」については、ともに平成17年度の方が、より多くの生徒に、子育てに関する責任の重さや協力の必要性を実感させる結果となった。妊婦さん方の話しやすさに考慮し、生徒との交流形式をとったことが、より効果的な体験談の伝達につながったのではないかと考える。

（3）自由記述

①妊婦さんの話を聞いた感想はいかがでしたか？

- ・新しい命を生むということは責任のいることなのだなと思いました。子どもができると妊婦さんみたいに幸せいっぱい表情になれるのかなあと思いました。
- ・大変だと思った。でも、おなかの中で赤ちゃんが動いたのを感じたとき“うれしかった”とおっしゃっていたので、早く赤ちゃんがほしいと思った。
- ・赤ちゃんを産むのは大変ですが、協力しないともっと不便なので、妊婦さんの気持ちを考えて協力できたらしてみたいと思います。文化祭などの行事でも、少し工夫すれば妊婦さんも楽しく参加できると思います。
- ・これから電車とかで妊婦さんをみかけたらいろいろ助けてあげたいです。

事前学習として、「自分が生まれたときのことを作文に書く」課題に取り組む中で、「母親といろいろ話のできたので良かった」という感想も聞かれ、家族の在り方や大切さを見直す良いきっかけにもなったようである。

また、妊婦さんに関心を向け、思いやりをもつこと等に関する記述も見られ、これらは、上記に「子育て理解教育」の指導内容例として挙げた「子どもの成長、発達において、地域・社会が果たすべき役割について考えること」に該当する。地域社会に所属する一員として、高校生である自分にもできることを考える、良い機会となったと考えられる。

また、「妊婦さん交流」でお話いただいた妊婦さんからは、以下のような感想をいただいた。

- ・楽しかったです。緊張してうまく話せませんでしたが、高校生の皆さんも聞いてくれてお腹にも触ってくれて本当に楽しいひとときでした。
- ・初めての体験でした。自分の学生の頃にはなかったので、このような授業があるのは良いと思います。もっとうるさい感じかと思っていましたが、生徒さんが真剣に興味をもって聞いてくれたので嬉しかったです。

妊婦さん方にとっても、妊娠・出産・育児という子育て体験を話すことで、次世代育成支援に貢献できるという体験は、自己効力感を高め、閉塞的な孤育てになりやすい育児を開かれたものにしていく一助となると考えられる。

3、赤ちゃんの理解

(1) 講義内容とアンケート調査結果

①平成16年度

「赤ちゃんを知ろう!」というタイトルで、新生児には生き延びていくために必要なものとして、さまざまな原始反射（口唇探索反射、吸綴反射、把握反射、モロー反射など）が先天的に備わっていること、乳児は自分の手を動かしながらじっと見つめるハンドリガードや指しゃぶりなど身体感覚・運動を通して知能を発達させていくこと、乳児があやしてくれる人の顔に対して表出する社会的微笑、赤ちゃん独特の言葉である泣きや喃語等は周囲からの働きかけを引き出す働きがあり、乳児はそれに応答してもらうことで基本的信頼感を育んでいること、一見マイナスに思える人見知りも実は親との愛着がしっかりできている証拠であること、母親の表情から母親の感情を読み取り自分の行動を決定していくことが可能であること等を、VTR資料を視聴させながら説明した。

受講後のアンケート調査結果（複数回答可）としては、「赤ちゃんの頃から凄い能力を持っていると思った」（58.6%）、「赤ちゃんとの関わり方がわかった」（21.9%）という結果が出た。下記の平成17年度の質問項目と照合してみると、それぞれ「理解度」と「有用度」に対応するものと考えられる。前者の理解度に比べ、後者の有用度がかなり低くなっている。乳児交流の事前学習としての位置づけ、あるいは、親となったときのための「子育て理解教育」という観点からすると、有用度をもっと意識しての講義内容の組み立てが必要であったと考えられる。

②平成17年度

前年度の反省を踏まえ、乳児にとっての「人見知り」や「泣くこと」の意義を伝えることを主なねらいとし、講義を組み立てた。乳児との触れ合い交流に協力・参加してくれる乳児は生後7～8ヵ月であることが多く、既に「人見知り」しやすい月齢に入っており、生徒たちがあやしたり抱っこしたときに泣かれてしまう可能性は高い。その体験を、赤ちゃんに「泣かれてしまった」・「嫌われてしまった」というような嫌悪あるいは挫折体験としない配慮が必要である。すなわち、「人見知り」は親との愛着がしっかりできている証拠であり発達上有意義な現象であること、また、乳児にとっての「泣くこと」は自分の欲求を伝えようとする意欲の現れであり、周囲に泣きに対して応えてもらうことで一生を生き抜いていくために重

要とされる「基本的信頼感」を育てていることを、VTR視聴をまじえながら説明した。

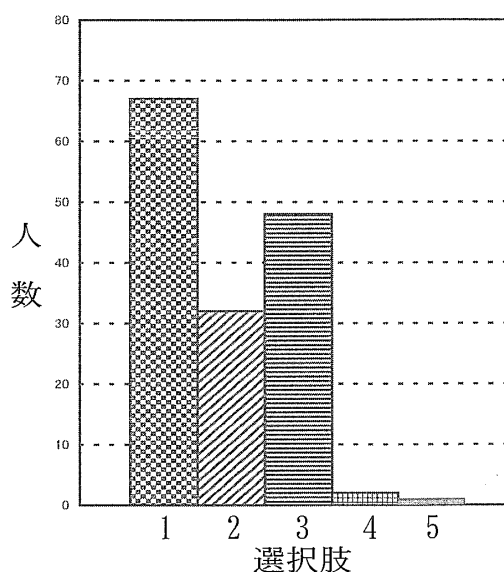
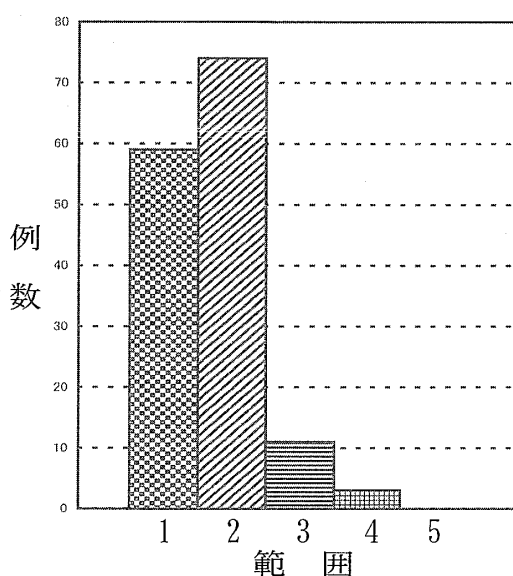


図2 乳児の発達について理解できたか 図3 今回の授業はこれからの生活に役立つと思うか
 <理解度> (全体) <有用度> (全体)

全体(男女)で、問1「乳児の発達について理解できましたか」(1理解できた 2どちらかという理解できた 3どちらともいえない 4どちらかという理解できなかった 5理解できなかった)の得点平均値[1.71点(SD=0.69)]と問2「今回の授業は、これからの生活に役立つと思いますか」(1役立つと思う 2どちらかという役立つと思う 3どちらともいえない 4どちらかという役立つたないと思う 5役立つたないと思う)の得点平均値[1.92(SD=0.94)]とをt(両側)検定してみると、 $p<.05$ の有意差で、問2の方が高かった。図2、3は、それぞれの得点分布を表したものである。つまり、理解度、有用度共に高得点といえるが、理解度よりも有用度の方が優位に高くなっている。上記のような、前年度の反省を踏まえての講義の組み立てが効果的であったといえる。

男子の人数は49名であり、109名の女子とは比較検討しにくい、参考までに掲載する。問1の男子得点平均値[1.89(SD=0.76)]と女子得点平均値[1.65(SD=0.66)]、問2の男子得点平均値[2.08(SD=0.97)]と女子得点平均値[1.86(SD=0.93)]とをそれぞれt(両側)検定してみると、優位差はみられなかった。一方、男子の問1得点平均値[1.89(SD=0.76)]と問2得点平均値[2.08(SD=0.97)]、女子の問1得点平均値[1.65(SD=0.66)]と問2得点平均値[1.86(SD=0.93)]とをそれぞれt(両側)検定してみると、男子においては優位差は見られなかったが、女子については $p<.05$ の有意差で、問2の方が高いという結果が出た。つまり、理解度、有用度共に高得点といえるが、理解度よりも有用度の方が優位に高くなっているのである。

(2) 自由記述

問2で「1役立つと思う」または「2どちらかという役立つと思う」を選択した生徒に対して、問3「今回の内容があなたの生活の中で具体的にどのように役立ちそうですか」を設定し、自由記述で回答を求めた。回答内容については、筆者の方で、内容的に同類と判断できるものはまとめて集計した。()内の数値は人数を示す。

「将来子どもができたなら役立つ」(45)が圧倒的に多く、「赤ちゃんの泣き声は何を訴えているかなどはお母さんになったときに役立つ」(28)、赤ちゃんの世話をするとき(17)、「月齢による行動の特徴を知ること」(8)、親戚の赤ちゃんの子守(4)、「近所の子どもとの接し方が変わる」、「うちに赤ちゃんがいるから役立つ」等が続く。また、本講義の意図をよく理解している記述として、「赤ちゃんのする意味不明なことにもいろいろ訳があってそれを考えると可愛いと思えた」「自分の子どもの変わった様子に気づいたときに成長し発達しているから心配ないってわかるし、基本的なことは理解しておいた方がいい」等があった。

一方、問2「今回の授業はこれからの生活に役立つと思いますか？」に対して、「3どちらともいえない」と回答した生徒の、問5「今日の授業を通して感じたことを自由に書いてみて下さい」の記述内容を見てみると、「赤ちゃんが可愛かった(13)」が一番多く、その他は「ビデオを見て楽しかった」「猿っぽい、かわいい」「多分赤ちゃんのことを知る機会があまりないので、良かった」等であった。

前者の回答には、発達のプロセスを学んで将来役立てようという意欲が感じられるのに対し、後者は表面的な感想にとどまっている。高校生にとって、「子どもは社会の宝である」という感覚は非常に持ちにくいものであらうと思われる。しかし、前者のように、「将来自分が親となる」あるいは「親世代として次世代を支援する」ことがイメージできる生徒のコメントは、上記のように「自分の子ども」に限らず、「近所」や「親戚」、「身の回り」等、自分の周囲に存在する子どもたちとの関わりに役立てたいという姿勢が見られた。また、2名であるが「保育士になりたいと思っているから知って助かった」という記載もあった。

III 今後の課題

○平成16年度の妊婦さんとの交流後の感想(自由記述)に、「ホルモン治療を受けている自分にとってはすごくつらい授業だった、涙が出るくらいつらかった」と記載した生徒が1名いた。すぐに学校の先生と連絡をとり、次回の乳児触れ合い体験時に、担当者から、本事業の目的について再度説明する機会を設けた。自分の母親の妊娠・出産という大変なできごとを通して初めて自分がこの世に誕生したのだということを考える機会にしてほしいこと、ヒトは人と人との関わりの中で成長・発達していくものであり、自分が子どもを産む・産まないに関わらず地域社会の一員として子育てに関する知識を身につけてほしいこと等を伝え、思

春期相談窓口についてのパンフレットを生徒全員に配付した。本事業のような講座は、一人ひとりの家庭環境、身体的・精神的な問題、成長過程などに十分配慮し、かつ、学校の先生との連絡・連携を密にしながら行っていかなければならないものであるとの認識を新たにした。

○少子化が急速に進む要因の1つとして、家事や子育ては女性の役割であるとの固定的な男女の役割分担意識も、女性に過大な負担感を与えていることが考えられる。さらに、かつては、同居する祖母や親戚などに、子育てについて相談したり、子育てを分担してもらったりすることができたが、核家族化や都市化の進展により、そうしたことは難しくなっている。同時に、地域社会の連帯感は希薄化し、地域の教育力も低下しており、子育てについて隣近所からの支援が得られにくくなっていることも、親への子育ての負担を一層増していると言える。しかし、もはや核家族での子育ては避けられない現実である。

佐倉東高等学校については、上記のような理由で男子生徒数が少ないが、本事業についての感想（自由記述）欄に、「女の人は大変なので、生まれたら精一杯手伝う」や「母親だけではなくて、父親もちゃんとかかわらなくてはいけない」というような記述が見られた。男子生徒と女子生徒とが互いに協力して子育て理解を深めることができれば、大変望ましいと考える。ちなみに、千葉県内の地域別合計特殊出生率は、すべての地域において低下しているが、1995年の調査における佐倉市の1.24という数値は、県内で最も低い値となっている。

佐倉市内には佐倉東高等学校の他にも3校の高校がある。また、「子育て理解講座」は、高校生ばかりでなく同じ思春期にある中学生にとっても、是非、体験し学んでほしい課題であるといえる。

しかし、「総合的な学習の時間」については現在進行中の各校独自の取り組みもあり、また派遣人員の不足等の問題からも、残念ながら現時点では不可能である。そこで、佐倉東高等学校での実践における年間学習プログラムや他機関との連携方法をまとめた冊子を作成し、各校に配布することで支援する形がとれればと考え、現在発行に向けて準備中である。もちろん、子育て理解教育実施の希望があれば、現時点でもオブザーバーとしてサポートすることが可能である。

〈参考文献〉

- ・ 国民生活に関する世論調査 2002 内閣府大臣官房政府広報室
- ・ 「子育て理解教育」指導資料 2004 文部科学省
- ・ 佐倉市家庭教育推進協議会実績報告書 2005 佐倉市家庭教育推進協議会
- ・ 佐倉市健康増進推進計画「健康さくら21」 2004 佐倉市福祉部健康増進課
- ・ 佐倉市次世代育成支援行動計画 2004 佐倉市福祉部子育て支援課
- ・ 少子化を考える～少子化の動向とその風景～ 2000 千葉県社会部児童家庭課